

## 音楽レビュー

### 「歌う」から「演じる」へ意識を変える オペラのワークショップが成果

幸か不幸か、大半が国立か公立で営まれるヨーロッパの歌劇場と違い、常設オペラハウスが東京・初台の新国立劇場1つしかない日本では、歌手グループやホールによる自主公演が中心で、過剰な資金自体がない。一方、バブル経済期を経て観客の裾野が広がり、歌手の水準は上がった。集客が比較的容易な名作で芸術の成果を競う市場構造で「見せ方」に知恵を絞るうち、演出の重要性は日増しに認知され、歌手の意識も変わりつつある。

#### ■社会構造や宗教観、古典演劇の影響を鮮明に描く井田邦明

バリトンの藪西正道、ソプラノの西野薫夫妻はイタリア文化会館との共催で「クオーレ・ド・オペラ」を立ち上げた。ミラノ在住の演出家で、安部公房の薫陶を受けた井田邦明が日本の若い歌手を指導するワークショップ形式でイタリア歌劇の制作を続けている。第2回の今年は8月29～31日、同文化会館でプッチーニの「ラ・ボエーム」を上演する。

日本では「ラ・ボエーム」を単なる青春群像、ヒロインのミミをひたすら「かわいく、薄幸な女性」として描きがちだ。だが在欧40年に及ぶ井田は、ドロップアウトした芸術家や文化人の総称である「ボヘミアン」の背景に横たわる社会構造、宗教観、イタリア古典演劇の伝統などの伏線に目を向ける。作品の舞台設定である1830年前後、第1次産業革命期に広がった貧富の格差がボヘミアンを生んだ状況はそのままオペラの初演時点、1896年の第2次産業革命の時代と「共通性があるとのインスピレーションに基づき、プッチーニは『ラ・ボエーム』をつくった」と、作品の出発点を規定する。



若い歌手たちを情熱的に指導する井田邦明（左）

イタリアの古都ルッカ出身のプッチーニは代々、教会音楽家の家庭に育った。「愛による人間の原罪からの解放や、絶望して自殺するのではなく、恋人と過ごした愛の巣に戻って迎える肯定的な死などのキリスト教的価値観と、当時のロマン主義的な近代精神が一体になって甘く美しい旋律へ昇華した」と、井田は作品を分析する。必要以上の深刻さを避けるため、随所に挿入された喜劇の要素には「コンメディア・デッラルテ（イタリア古典喜劇）の伝統が色濃く出ている」という。

日本でもシリアスな能、コミカルな狂言は表裏一体の演劇分野とみなされてきた。藤原歌劇団が「ラ・ボエーム」を日本初演した1934年は、東北地方の大凶作で「ミミのような娘たちの身売りが問題化していた」。さらに現代社会は「無尽蔵なまでのグローバル化と繁栄の中、世界にはエイズ（後天性免疫不全症候群）をはじめ日常的な死がまん延している。いつの時代にもミミの青春が光り輝く理由はそこにあり、今の日本を生きる若い歌手たちにもきちんと説明すれば、問題なく演じられる」と確信し、情熱的な指導を続ける。

（電子報道部）